

玉串	玉串
遷宮	遷宮
言霊	忌み言葉
神奈備	神籬
御幣	幣

<p>玉串を神前に捧げて拝礼することを玉串奉奠(たまくしほうでん)、天照大神が岩戸隠れした際、玉や鏡などをつけた五百津真賢木(いほつのまさかき)をフトダマが捧げ持ったとの記述が、玉串の由来とされている</p>	<p>神事において参拝者や神職が神前に捧げる、紙垂や木綿(ゆう)をつけた榊の枝である。杉、樅、檜のこともある。神宮大麻の裨い串のように参拝の証として持ち帰り千度裨い万度裨いを行う例もある。</p>
<p>伊勢神宮の正宮及び別宮では、基本的には20年毎に定期的に本殿を建て直しており、これを式年遷宮(しきねんせんぐう)と言う。この時の式年とは定められた年という意味である</p>	<p>遷宮(せんぐう)とは神社の本殿を造営・修理する際や本殿を新たに建てた場合に、神体を移すことである本殿の造営・修理・再建およびその祭礼をいう。</p>
<p>忌詞(いみことば)それを口にすることを良しとしない言葉あるいは、それを言い換えた言葉。日本語の場合、血や死を不浄とする傾向がありこれらの関係語にはかなり忌み言葉が存在する。伊勢神宮の斎宮は、仏教用語を避ける。</p>	<p>日本において言葉に宿ると信じられた霊的な力のこと言魂とも書く。良い言葉を発すると良い事が起こり、不吉な言葉を発すると凶事が起こるとされた。そのため、祝詞を奏上する時には絶対に誤読がないよう注意する</p>
<p>(ひもろぎ)神社や神棚以外の場所において祭を行う場合、臨時に神を迎えるための依り代となるもの。形式は八脚台という木の台の上に杵を組み中央に榊の枝を立て、紙垂と木綿(ゆう)を取り付けたもの</p>	<p>(かんなび)神が鎮座する、または隠れ住まう山や森の神域。神籬や磐座となる森林や神木(しんぼく)や鎮守の森や山(霊峰富士)、または岩(夫婦岩)や滝(那智の滝)などの特徴的な自然物がある神のいる場所をいう。</p>
<p>私幣禁断とは天皇家の祖霊を祀る伊勢神宮を天皇・皇后・皇太子以外が祀ることを禁じたことを言う。</p>	<p>(ごへい)祭祀で用いられる幣帛の一種、2本の紙垂を竹または木の幣串に挟んだもの。幣束(へいそく)幣(ぬさ)も同義。通常は白い紙で作るが、御幣にとりつける紙垂は白だけでなく五色の紙や、金箔・銀箔が用いられることも</p>

国史見在社	社格
社格	神札
神宮大麻	斎宮
式内社	延喜式神名帳
延喜式	別格官幣社

<p>神社の格式。祭政一致に基づき、朝廷などにより定められる。</p>	<p>(こくしげんざいしゃ)六国史に記載のある神社(=国史現在社・国史所載社)ただし「六国史」に見える神社はほとんどが式内社であるため、通常は式外社について用いる。格式高い神社として後世になって特別視された。</p>
<p>(しんさつ)神社が頒布する護符お札と呼ばれるが、お守りとも呼ばれる守札も神札である。神名や神社名・天照皇大神宮(アマテラスこうたいじんぐう)また神を象徴する物を紙、木札、御神砂、御神水、金属片などに記したもの</p>	<p>別表神社:社格制度廃止後は全ての神社は対等の立場とされた(伊勢神宮除く)が旧官国幣社や一部大規模神社は神職の進退等において不都合があり「役職員進退に関する規程」において特別な措置をしたもの</p>
<p>(さいぐう、さいくうまたはいつきのみや、いわいのみや)古代～南北朝時代にかけて伊勢神宮に奉仕した斎王の御所平安時代以降は賀茂神社の斎王(斎院)と区別するため斎王のことも指すようになった。</p>	<p>伊勢神宮が直接頒布し、又は神社本庁経由で頒布する神宮大麻(じんぐうおおぬさまたは単に大麻(おおぬさ、たいま))が代表的。熊野三山で頒布される熊野牛王符(牛王宝印)は平安～近世には裏が起請文に用いられた</p>
<p>延喜式神名帳(えんぎしき じんみょうちょう)とは、延長5年(927年)にまとめられた『延喜式』の巻九十のことで、当時「官社」とされていた全国の神社一覧である</p>	<p>延喜式神名帳に記載された神社を、「延喜式の内に記載された神社」の意味で延喜式内社、または単に式内社(しきないしゃ)、式社(しきしゃ)といい、一種の社格となっている</p>
<p>官幣社にも国幣社にも分類できない官社(当時の国体に功績を挙げた人物を祀る神社など)として別格官幣社の制度が導入されM5年湊川神社が初の別格官幣社に列格した。別格官幣社は官幣小社と待遇の上では同じ</p>	<p>平安時代中期に編纂された格式(律令の施行細則)で、三代格式の一つである 三代格式のうちほぼ完全な形で残っているのは延喜式だけであり、かつ細かな事柄まで規定されていることから、古代史の研究では重要な文献</p>

皇大神宮	釈日本紀
唯一神道名法要集	古事記伝
度会家行	平田篤胤
山崎闇斎	伊勢神道
伊勢神道	屋根

<p>釈日本紀(しゃくにほんぎ)は、鎌倉時代末期の1274年(文永11年)～1301年(正安3年)頃に成立したと推定される『日本書紀』の注釈書著者は卜部兼方(懐賢)。全28巻。</p>	<p>804皇太神宮宮司大中臣真継(おおなかとみのまつく)らが神祇官に提出した解文。年中行事の大綱、神々鎮座の伝承、宮域および殿舎の構造・様式、装束神宝の細目、禰宜・神官の職掌、神郡・神戸・神田の管理経営など</p>
<p>(こじきでん、ふることぶみのつたえ)江戸時代の国学者・本居宣長の『古事記』全編にわたる全44巻の注釈書である『記伝』と略される。代文学研究、あるいは古代史研究にも極めて大きな影響を及している</p>	<p>唯一神道名法要集(ゆいいつしんとうみょうほうようしゅう)は、卜部兼延の著作とされるが、祖先に仮託した吉田兼俱の偽作であろうとされる。唯一神道に関する事項を問答形式で記述する。唯一神道の経典の第一とされる。</p>
<p>江戸時代後期の国学者・神道本居宣長らを引き継ぎ儒教・仏教と習合した神道を批判、尊皇攘夷の支柱となり、倒幕後の明治維新変革期の原動力となる。後の神仏分離や廃仏毀釈にも影響</p>	<p>(わたらい いえゆき)伊勢神宮の外宮(豊受大神宮)の神官で、伊勢神道の大成者建武の新政挫折後の南北朝の動乱で南朝方の北畠親房を支援し、南伊勢地区の軍事的活動にも挺身した</p>
<p>伊勢神宮で生まれた神道の説。外宮の神職度会氏の間で発生。豊受大神宮(外宮)</p>	<p>(やまざきあんさい)江戸前期儒者・朱子学者・神道家 津藩主保科正之の下で領内の寺院・神社の整理、神仏習合を排除。従来の神道と儒学を統合して、垂加神道を開いた。幕末の尊王攘夷思想に大きな影響</p>
<p>千木(ちぎ)・鯉木(かつおぎ)は今日では神社建築にのみ見られる建造物の屋根に設けられた部材 千木は屋根の両端で交叉させた木であり、鯉木は屋根の上に棟に直角になるように何本か平行して</p>	<p>鎌倉時代・室町時代を前期、江戸時代を後期とする。代表的な神道家として、度会家行や出口延佳(でぐちのぶよし)などがいる。また主な経典として『神道五部書』がある</p>

屋根	相殿神
相殿	

<p>通常、神社では複数の神を祀っており、その中で主として祀られる神を主神(しゅしん)・主祭神(しゅさいじん)、それ以外の神を配神(はいしん)・配祀神(はいししん)・相殿神(あいどのしん)などという。</p>	<p>出雲大社を始めとして出雲諸社は祭神が男神の社は千木を外削ぎ(先端を地面に垂直に削る)女神の社は内削ぎ(水平)他の神社でも多い。また鰹木の数は奇数は陽数・偶数は陰数とされ男神・女神の社に見られる</p>
	<p>相殿(あいどの。合殿とも書く)とは、主神を含めて複数の神が祀られた社殿のことを指す。「相殿神」とは相殿に祀られる神のことであるが、主神と配神とがある場合は配神のことを相殿神という</p>